

幼児・児童の心的動詞表現の理解に関する研究

著者	小泉 嘉子
号	11
学位授与番号	75
URL	http://hdl.handle.net/10097/37105

こ いづみ よし こ
小 泉 嘉 子

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教博 第 75 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 教育心理学専攻
学 位 論 文 題 目	幼児・児童の心的動詞表現の理解に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 本 郷 一 夫 教 授 菊 池 武 剋 教 授 長谷川 啓 三

論 文 内 容 の 要 旨

コミュニケーション場面において、我々は発話の中から他者の意図・信念・気持ちなどの心の状態を表す情報を見つけ出し、推測することが求められることが多い。その際、「思う」「知る」といった人の心の状態を表す動詞表現（心的動詞表現）は、伝達する情報の確実性（不確実性）を示したり、話し手の主観性を伝えたりするなど、コミュニケーションを進めていく上で重要な役割を担っている。

しかし、このような心的動詞表現は、2つのあいまい性をもつという点で、幼児・児童にとってその理解は容易ではない。すなわち、第1にリファレントをもたないという点でのあいまい性（「抽象表現的あいまい性」）をもつ。第2に、他の語と組み合わせられ、真偽判断では示されないような段階的性質（「中間段階的あいまい性」）をもつ。そこで、本研究では、このような2つのあいまい性をもつ心的動詞表現を幼児・児童がどのように理解するようになるのかといった点について明かにすることを目的とした。より具体的には、幼児・児童を対象に、心的動詞表現における①抽象表現的あいまい性、②中間段階的あいまい性、という2つのあいまい性の理解の発達過程を明らかにすることを第1の目的とした。また、このような2つのあいまい性を捉えるための方法を開発することを第2の目的とした。本論文の構成と内容は以下の通りである。

第I部「問題と目的」は4つの章から構成される。第1章では問題の背景と他者の心的状態の

理解に関する研究を概観した。第2章では、心的動詞表現の理解に関する研究を概観し、心的動詞表現には2つのあいまい性（抽象表現的あいまい性・中間段階的あいまい性）があることについて言及した。また、中間段階的あいまい性を捉えるための方法として、あいまい性の測定方法について言及した。第3章では、心的動詞表現の理解の発達について従来の研究を概観し、予想される発達過程について言及した。第4章では、第1章から第3章を踏まえ、本研究の目的と構成について述べた。

第Ⅱ部「心的動詞表現の理解に関する実験的検討」は6つの章から構成される。第5章、第6章（研究Ⅰ、研究Ⅱ）では、「心的状態語を含む文」と「外的状態情報を含む文」という2つの文を提示し、抽象表現的あいまい性の理解について検討を行った。その結果、抽象表現的あいまい性の理解は、4歳頃から始まり6歳に完成することが示された。第7章（研究Ⅲ）では、心的動詞表現の外延的定義の理解と内包的定義理解の発達の関係について検討を行った。その結果、心的動詞表現の外延的定義の理解は4歳頃から、内包的定義の理解は6歳頃から始まり、7歳に至って2つの理解が統合されることが示唆された。

第8章、第9章（研究Ⅳ、研究Ⅴ）では、中間段階的あいまい性のありうる程度・ありうる範囲を捉えるために、あいまい性の測定方法についての検討を行った。第8章（研究Ⅳ）では、心的動詞とヘッジ（程度副詞）とを組み合わせることで中間段階的あいまい性を段階的に操作し、大人がどのようにありうる程度を理解するのかについて、点推定法を用いた質問紙法によって検討を行った。第9章（研究Ⅴ）では、大人におけるありうる程度・ありうる範囲の理解について、コンピューター上で作動するVBAプログラムを作成し、点推定法・区間推定法によって検討を行った。

第10章（研究Ⅵ）では、6歳～8歳を対象に「心的動詞表現の中間段階的あいまい性の理解の発達過程について検討を行った。実験に当たっては、幼児・児童用のプログラムを開発した。その結果、6歳では、心的動詞とヘッジとを組み合わせた場合、心的動詞の種類にかかわらず、50%の上か下かといった「2値的理解」がなされていることが示された。7歳になると、「思う」「知る」といった心的動詞表現間の違いが理解されるようになった。さらに、8歳になると、心的動詞とヘッジを組み合わせた場合、中間段階的あいまい性の理解がなされているようになることが示された。

第Ⅲ部「討論」は2つの章から構成される。第11章では、研究Ⅰから研究Ⅵまでの結果を統合し、心的動詞表現の理解の発達に関する3段階モデルが提示された。このモデルでは、第1段階で、まず抽象表現的あいまい性の理解がなされる。次に、第2段階では過度的な段階であり、心的動詞とヘッジ（程度副詞）を組み合わせることにより、2値的理解が可能となる。第3段階では、「少し思う」「思う」「少し知る」「知る」などの表現についての理解が可能となるという点で、中間段階的あいまい性の理解がなされる段階である。このような3段階の発達を経て、後には、大人のように心的動詞表現と程度副詞のもつ順序性を超え、新たな系列を創出することができるよ

うになると考えられた。以上の結果から、幼児・児童における発達には、「あいまいから明確へ」といった発達過程だけではなく、「あいまいなものをあいまいなまま理解する」といった理解のプロセスがあることが示唆された。

本研究の第2の目的は、心的動詞表現の中間段階的あいまい性を測定し、定量化する方法を開発することであった。この点については、主として研究Ⅳ、研究Ⅴ、研究Ⅵを通じて、大人だけではなく、幼児・児童においても、中間段階的なあいまい性を測定することが可能であることが示された。すなわち、①絵と音声による視覚的・聴覚的提示、②ゲーム感覚的な課題構成、③点推定法における2段階（2択・3択）による評定尺度、④区間推定法における具体物を用いた評定尺度、という4つの工夫が有効であることが示唆された。

最終章である第12章では、本研究で示した発達モデルと測定方法は、心的動詞表現の主観性の理解に関する研究にも応用可能であること、また心的動詞表現だけではなく感情語などその他の心的状態の理解の過程を明らかにする場合などにも応用可能であることが示された。さらに、コミュニケーションに困難さをもつ幼児・児童の問題を明らかにするためのアセスメント方法への適用可能性についても議論された。

論文審査の結果の要旨

従来、乳幼児期の発達研究においては、「未分化―分化―統合」という流れによって理解されるように、あいまいなものが次第に明確なものに変化する過程が想定され、その過程を明かにしようとする研究が多くなされてきた。しかし、人とのコミュニケーション場面においては、他者の意図を明確化して理解するだけでなく、他者の発話の意図はある程度の範囲をもつものであり、状況や文脈によって変化しうるものだとして理解することも重要となる。いわば、他者の発話のあいまいな側面をあいまいなままに理解することが必要とされる。本論文は、このような問題意識から出発して、「思う」「知る」などの心的動詞表現を幼児・児童がどのように理解するようになるのか明かにしようとしたものである。

本論文の優れた点としては、第1に、心的動詞表現がもつあいまい性、すなわち、リファレントをもたないという点での「抽象表現的あいまい性」と程度副詞（ヘッジ）と組み合わせられて段階的性質を生み出すという点での「中間段階的あいまい性」という2つのあいまい性の理論が幼児期から児童期にかけてどのように発達するのかを実証的に描き、心的動詞表現の理解に関する3段階モデルを提案したことである。このモデルでは、まず「抽象表現的あいまい性」の理解がなされ、それを基礎として心的動詞とヘッジが組み合わせられた表現に関する2値的理解の段階を

経て、中間段階的あいまい性の理解がなされる過程が示されている。また、この3段階モデルは、研究を通して得られたデータと整合性があるだけでなく、物の系列化に関する従来の研究から得られた知見とも一致するものである。

本論文の優れた点として、第2に、心的動詞表現の「中間段階的あいまい性」を測定するための方法を開発したことである。用いられたいくつかの方法のうち、具体物を用いた評定尺度自体は幼児に関する実験において比較的多く用いられるものである。しかし、①絵と音声による視覚的・聴覚的提示、②ゲーム感覚的な課題構成、③点推定法における2段階（2択・3択）による評定尺度、から構成されるコンピューター・プログラムを作成し、幼児・児童に対する実験に適用している点は、評価に値する。

本論文の問題点としては、①心的動詞表現の2つの側面である「不確実性の理解」の側面と「主観性の理解」の側面との関連についての説明が十分ではないこと、②「心の理論」に代表されるような他者理解に関する課題、従来から研究が積み重ねられてきた役割取得能力や視点取得能力の発達との関連についての考察が十分ではないこと、が指摘できる。この点については、今後の実証的研究の成果を踏まえ、モデルに組み込んでいくことが課題として残されている。

以上のような課題もあるが、本論文は、6つの実験を通して得られた実証的データに基づき、幼児期から児童期にかけての心的動詞表現の理解の発達に関する新たな知見を提供するとともに、幼児・児童を対象とした他の領域の発達研究にも応用可能なプログラムを開発した点で高く評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。